

二〇二二年度

入学試験問題

I 国 語

(五十分)

注 意 事 項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 試験問題は22ページあります。
- 3 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 4 解答用紙にマス目(例：

--

)がある場合は、句読点などそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。
- 5 終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受験番号

--	--	--	--	--

問題は次のページから始まります。

【一】 次の文章は、作者（上田秋成）が九月に曾根村（現在の兵庫県高砂市）を訪れ、曾根崎神社に詣でた時のことを描いた部分です。その日はちょうど新嘗祭が行われていて、多くの人でにぎわっていました。読んで、あとの問いに答えなさい。

曾根崎の社に詣づ。今日ぞ新なめ奉る日なりとて、いと賑ははし。おそく詣でつれば、何わざもえ拜み侍らず。この広前の松陰に、潮の湧くがごとく

人立ちこめて、叫びののしる。何ごとぞと見たれば、すまひが庭の、今ぞ手合せすと聞こゆ。この国のたちから男は、今日今日と待ちつけたれば、きそ

ひ立ち、西東と、百手つがひ定めたるべし。見る人もえいや声をつくりて、おのれおのれが引くかたをたのむ、いといさましな。足よわきものは、岡

にのほり、木の枝にさがりて危うげなり。あるが中にも、老いたる人の、いときなき者を背に負ひて、いかでいかでこれ見んとする。人ひしひしと立ち

並みたれば、岩ほをさくに似て、いとけなきがいたう物おびえして泣く。いといたう危うし。残りの齡いつまでとか、かかる物見はする。このうま子し

ら玉どもかしづくらん。押し打たれば、いかばかりか泣きまどはん。世に憎きものの限りなりける。

やがて事はてしよ。雲井とどろく声して、人立ち騒ぎ、山も動き出づることくなるも、別れ別れに散り行きぬ。それが中に今日のぬき出ならめ、勝ち

ほこり、大路ふみはららかし、いと猛に、人おしわきゆく。「ぬるはたが子ぞ」と言問はまほしく、見る人もこれ羨むなん、いみじきめいぼくなりける。

〔秋山記〕 一部改変したところがある。

※1 新なめ…その年にとれた新穀。

※2 広前…神前を敬つていう。

※3 たちから男…力自慢。

※4 えいや声…かけ声。

※5 ぬき出…相撲の節で選出された成績の良い者。勝者。

問一 —— 1 「いといさましな」の意味として、最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 大変勇敢だなあ。
- 2 興味深い勝負だなあ。
- 3 たいそう熱心だなあ。
- 4 お互いに騒がしいなあ。

問二 —— 2 「世に憎きものの限りなりける」とありますが、どういふことですか。その説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 大勢の人が密集し危険な見方をする人もいるので、はかない物事に執着して理性を無くす人々を憎らしく思っている。
- 2 あまりの人混みで、背負った孫が泣いて怖がっているのに、それでも相撲を見ようとすると老人を憎らしく思っている。
- 3 皆相撲が見たくて大変な思いをしているなか、幼い孫を背負う老人は目障りで、泣きわめく子も憎らしく思っている。
- 4 老人の背に負われている幼い子がいるのに全く頓着せず、押し合っただけで見て周囲の大人たちを憎らしく思っている。

問三 —— 3 「『ねるはたが子ぞ』と言問はまほしく」について、次の問に答えなさい。

(1) この部分は、「銀の目貫の太刀をさげ佩はきて奈良の都をねるは誰たが子ぞ（銀製の目貫をはめた太刀を腰につり下げて、奈良の都を「ねる」のは何という若者だ）（『神楽歌』）」を踏まえた表現です。「ねる」に当てる漢字として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 寝る
- 2 根る
- 3 練る
- 4 錬る

(2) 作者にこのように感じさせるこの時の「ぬき出（勝者）」の様子として、最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 勝利に酔いしれている様子。
- 2 意気揚々として華々しい様子。
- 3 多くの人にかしずかれています様子。
- 4 強引に人をかき分け突き進む様子。

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

卒業式を終えて家にもどった祐人は、きょうでお払い箱となる制服を脱いでジャージに着がえた。それから、壁を背もたれにしてベッドに足をなげだし、帰りがけにバーガーショップで買ったチーズバーガーにかぶりついた。云うまでもなく、耳にはヘッドセットを装着している。

自家製バーガーを売る店の特大サイズで、パンズも敷地内のパン工房で焼いたものだ。無添加、無着色の肉は国産、ピクルスのミニきゅうりは自家栽培である。だから、一個が一三〇〇円もする高級品で、卒業祝いだからこそありつける大ごちそうでもあった。ドリンクもいつものジンジャーアップルではなくキウイミックスを買った。

母とは学校近くの交差点で別れた。気のあう親たちだけで集い、ランチを食べにいくのだ。店の予約をするさいに祐人も誘われたが（ほかのメンバーも親子で参加する）、ついさつき卒業したばかりで、またもや同級生と顔をあわせるのも、その親たちと同席するのもうつとうしだったので断った。

さいわい、しつこくカンユウする気質ではない母は、すぐに引きさがった。息子のために思いわずらうのを良しとしない人でもある。かわりに、御祝儀を上乗せした昼食代をくれた。

おかげで、ぜいたくができるのだ。祐人はめつたに味わえない高級バーガーを買って家にもどってきた。

式はつまらなかった。どんよりした曇り空のもと、今年にかぎって芽吹きのおそい門脇の桜は、灰色に冬枯れたままだった。生徒たちは吹きもどしの北風に身をすくめ、冴えない顔色をして、うす暗い体育館に集まった。

前夜にふった雨はやんでいたが、古びた体育館では雨もりがした。晴れがましい席だというのに、舞台袖のひとすみでは雨水を受けるバケツを置かなければならなかった。壇上の緋色の幕も色あせ、襷をひろげれば、白くぼんやりしたタテ縞があらわれる。予想されたことだが、来賓はそろってありきたりの話しかしなかった。

「若いきみたちの希望に満ちた明日を祝して」だの、「かがやける未来へ羽ばたく若者へ」だの、小学校の卒業式でも耳にした。

あのときは、海外の赴任先にいた両親の帰国が遅れ、かわりに祖父のつきそいで式に臨んだ。役人がルーズな国では、あらゆる手続きにアクシデントが起こりうる。しかも、煩雑な書類をやまほど書かせるのだ。

「ハゲ頭がならんだだけあって、実のある話はなかったな。禿という字は実の抜けたカラのことだぞ。」

それが、卒業式を終えた祖父の感想と、祐人へのはなむけだった。「ただで知恵をさずけるバカもあるまい。」とも云った。さらに「たったひとりのバカをのぞけば、だがな。」とつけくわえた。

そのバカとはだれのことかと問う祐人に、祖父は「いずれわかる。」とだけ答え、さあ牛鍋を喰いにいこうや、と足をはやめた。

後日、卒業祝いとして一冊の本をよこした。アルファベットで書かれた挿し絵つきの本だった。印刷の文字が大きいところをみれば児童書らしい。しかし、外国語である。タイトルも解読不能の**コ**った書体だ。

海外暮らしでは現地校に通っていた祐人なのだが、その本は読めなかった。英語ではなかったのだ。訳してほしいと頼んだが、ワシにもわからん、とにべもない。人を食った祖父だった。だが、だれよりも信頼できた。

中学受験にそなえて両親より半年はやく帰国した祐人は、小学校最後の半年を祖父のもとで暮らしたのだ。結局、受験しないで地元の公立中学に入學した。自宅から徒歩五分のところに学校がある。なれない電車通学で消耗するより、のんびり朝食を**ト**って近くの公立中学へ通う日常を選んだ。きょうは、その中学の卒業式だったのだ。祖父はもういない。

「いい式だったわね、来賓の話が短くて。」

母はそう云って、いそいそとランチに向かった。うわさ話がつぎつぎに練りだされ、デザートがすんでもまだ足らずに時間を延長して、長々としゃべりつづけるにちがいない。人の話が長いのはきらうくせに、自分たちのおしゃべりは問題にしない。

父はまたもや海外勤務となり、祐人が卒業する十日前に単身赴任した。現地の大気汚染を問題にする母は、排気ガスを吸いたくないと云って家族そろっての赴任を断った。そのかわり、父のトランクに高機能マスクを大量に詰めこんだ。

祖父ならば、きょうの式を終えてどんな皮肉を云っただろうか。祐人は祖父の写真をひっぱりだして机のうえにおき、心のなかで卒業の報告をした。声は聞こえてこない。

祐人が求めていたのは、この先を生きるのに役立ちそうな意味のある祝辞だ。ひとかどの大人になったとき「私の背なかを押してくれた、あのひと」と回想し、「その出逢いがなければ、いまの私はなかった」と断言しうる、そんなことばを期待していた。だが、型どおりの、つまらない話ばかりがつづいた。

かつて祖父が口にした「ただで知恵をさずけてくれるバカ」は、こんどもあらわれなかった。おそらく、この先もあらわれないだろう。祐人は暗い気持ちになった。

だれもが嘘をついている。明日や未来になにが待ちうけているにしても、希望やかがやきなど思い描けなかった。形にならず、もやもやとした不安がわだかまるばかりだ。

きょうの曇り空に似ている。薄日も射さない。かといって雨がふるのでもない。いつそ、どしゃぶりであったほうが、

A

だろうと祐人は思

う。

父から届いたメールに、この街では太陽の黒点が見えるぞ、と書いてあった。上空をおおったスモッグ越しに、ということばが省かれている。つまり、ふだんはまぶしすぎて直視できない太陽の表面が、大気汚染によってフィルターをかぶせたのとおなじ状態となり、黒点を目にできるのだ。そんな大気を毎日吸って、父は早死にするかもしれない。

高級バーガーはうまかった。パテも彼の好きなビーフの赤身で、チーズは濃厚なチェダーチーズがつかってあった。スライスマトの酸味との相性もよい。とけたチーズのうえに粗挽きのブラックペッパーをたっぷりかけてあるのも好みだった。それに、キュウリ、というよりはキューカンバーと呼ぶのがふさわしい極太のピクルスは、祐人がほんのちびっ子だったころに暮らした西海岸のダイナーでおぼえたのとおなじ味だった。それで、少し気が晴れた。

久しぶりに例の本を書棚から取りだしてみる。小学校の卒業以来だ。パラパラとめくった。

意外にも、読むことができた。英語だったのだ。小学校を卒業したばかりの祐人には、たしかに自分の知らない外国語のように思えたのだが、書体が古めかしかっただけかもしれない。

あるいは、人を使ったことを好む祖父が、こっそりすりかえたのだ。大いにありうる。「きみに、聞かせたい話」というタイトルだ。扉ページにケンジがあり、この本は著者によって「小さな小さなダニエルへ」捧げられている。その右肩に、「祐人へ」と祖父の筆跡で書き足してあった。

エピソードごとに、一枚の挿し絵がついている。その絵の助けを借りながら、祐人は本を読んだ。

※¹
fig1

ひとりの若者が、勉強を放りだして仲間と笑いころげている。誘いをうけて、遊びにゆくところだ。彼と少し離れて遠慮がちにたたずむ中年の男がいる。若者のほうへ、おずおずと進みでて「おせっかいを承知で云うのですが」と話しかける。しかし、若者は聞く耳を持たない。男は「いずれまた」とつぶやいて立ち去る。男の名はあきらかでないが、TとSを組み合わせたモノグラムがコートの衿えりに縫いとられている。よって著者は男をT・Sと呼ぶ。

fig2

若者は二十歳をすぎた青年に成長した。露出の多い、スポーツウエアの若い娘と連れだつて楽しげに街を歩く。ついさっきまでは、静かにお茶を飲むのが好きだという、べつの娘と会っていた。きのうは三人の娘と過ごし、そのうちの二人の名前はもう忘れていた。そこへT・Sがあらわれ、青年を呼びとめた。「お聞かせしたいことが、あるのです」と云う。だが青年はうるさそうにT・Sを追いはらった。

fig3

いくぶん額のひろくなつた人物が、顔を曇らせている。あの青年のようだが、いまではすっかり中年だった。帽子店の鏡をのぞきこんで、薄くなつた髪の毛を気にしている。鏡のなかに、T・Sが映りこんでいた。憐れみをたたえたまなざしで「もはや、聞かせるまでもあるまい」と独りごとを云う。

fig4

葬儀に参列する頭のハゲた男がいる。彼の母親が亡くなつたのだ。故人とゆかりの人々は、いずれも老いが深い。花をタム^eけにきた彼らと少し離れて、T・Sもたたずんでいる。 B 若者のようすがうかがつていたところと異なり、いまでは C 姿をあらわしていた。

fig5

かつての青年は、すっかり腰のまがつた老人となり、杖を頼りに歩いている。目も悪いらしく、T・Sが待ちかまえているところへ向かつて進み、とうとうぶつかった。老人は「あなたは死神ですか」とたずねた。T・Sは、いいえ、と答える。

「私は、たんなる時の記録人^{スコアラー}ですよ。あなたの時間がどのくらいあるかを、知っているだけなのです」

翌朝、教会では弔いの鐘が鳴った。

fig6

T・Sは、ベンチにすわっている。くつろいだようすで、道ゆく人をながめている。その背後には教会があり、結婚式を挙げたばかりの若い男女が人々の祝福を受けているところだった。

fig7

若い夫婦に赤ん坊が生まれ、知人たちが祝いに訪れる。T・Sも人々にまじっていた。赤ん坊はゆりかごのなかで、すやすやと眠っている。

fig8

T・Sは、赤ん坊の耳もとで、そっとささやいた。「きみも、若者になれば聞く耳を持たないだろう。だから、いまのうちにこっそり知恵をさずけよう」

だが、そのことは記されていない。この本はギフトブックで、メッセージは本を買った人がそれぞれに書き入れるものなのだ。はぐらかされた²思いをかかえて、祐人は本を閉じようとした。そのとき、最後のページに祖父の手書きの文字があるのを見つけた。

きみは、もう若くない。

目がさめた。祐人はチーズバーガーを食べているうちに、いつのまにか、まどろんでいたのだ。ひと口ぶん、まだ残っている。それをたいらげ、ペーパーナプキンで口と指先をぬぐった。あらためて、祖父が寄こした本をさがした。それは、本棚にあった。

現実では、やはり読めない外国語のままである。だが、夢のなかの本は祐人の記憶にもとづいて形になったらしく、挿し絵はだいたいいたようなものだった。

見落としていたかもしれないと思い、いそいで最後のページをひらいた。だが、そこには余白があるばかりだ。

ただで知恵をさずけるバカはいない。祖父は、

D

の人物だった。

クローゼットのなかには、来月から通う高校の新しい制服がひかえている。祐人は、ためしにその制服を着てみた。先月、それができあがってきたときは、まだ借りものようだった。だが、いまはもう少ししました。

きみは、もう若くない。鏡に向かい、自分でそうつぶやいてみた。すると、つづけて祖父の声が聞こえた。

……それが、真実だ。時間をむだにするな。

ふりかえった先に、さつきひっぱりだしておいた祖父の写真があった。

そうなのだ。若いと云われるから腹が立つ³。十五歳は、もう若くない⁴。

(長野まゆみ「きみは、もう若くない」一部改変したところがある。)

※1 fig…挿し絵の意味である figure の略語。

※2 モノグラム…頭文字などを二個以上組み合わせ、一字状に図案化したもの。組み字。

問一 — a～eに相当する漢字を含むものを、次の各群の1～4の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

a カンユウ

- 1 カンジを務める。
- 2 カンシンを買う。
- 3 カンデンを弄する。
- 4 カンゼン懲悪を主題にする。

b コった

- 1 ギョウギよく座る。
- 2 血液がギョウコする。
- 3 ギョウセキを上げる。
- 4 恐ろしいギョウソウでにらむ。

c トつて

- 1 自然のセツリを探究する。
- 2 セツジツな公害問題と捉える。
- 3 エネルギー資源を守るためにセツデンする。
- 4 本学の前身は一八八五年にソウセツされた。

d ケンジ

- 1 主君にケンサクするも採用されなかった。
- 2 この数年で社会の問題がケンザイ化した。
- 3 一般にケンキヨな人は周囲から慕われる。
- 4 医者になろうとする彼の意志はケンゴだ。

e タムけ

- 1 活をいれて選手のタツナを締める。
- 2 彼女からは何のオトサタもない。
- 3 彼の失敗をタザンの石とする。
- 4 過疎化によりタハタが荒れる。

問二——ア～ウの語句の意味として最も適切なものを、次の各群の1～4の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。
ア ありきたりの話

- 1 自然な話 2 単純な話 3 陳腐な話 4 想定外な話

イ にべもない

- 1 如才ない 2 素気ない 3 情けない 4 いたたまれない

ウ ひとかどの

- 1 一段と 2 端的に 3 同様に 4 一人前の

問三——1「知恵」とあるが、「祐人」の考えていた「知恵」にあたるものはどのようなものか。そのことを説明した次の文の [] に当てはまる言葉を、本文中から二十字程度で抜き出し、その最初と最後の三字をそれぞれ答えなさい。

祐人の考えていた知恵にあたるものは、 [] 言葉のことである。

問四 [] A に当てはまる言葉として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 いらいらした 2 じりじりした 3 せいせいした 4 ぞくぞくした

問五 [] B ・ [] C に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適するものを次の中から選び、その番号を答えなさい。

- 1 B 謙虚に ・ C 凶々しく 2 B 畏まって ・ C 無礼に
3 B 自制して ・ C 容赦なく 4 B 遠慮がちに ・ C 堂々と

問六 ——— 2 「はぐらかされた思い」とあるが、このときの「祐人」の心情を説明したものととして最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 あえてメッセージを記さなかった祖父の行動の真意を測りかねている。
- 2 小学校の卒業祝いでも人を食った振舞いをする祖父の態度に慌てている。
- 3 小学生である自分に結末を考えさせようとする祖父のやり方に退屈している。
- 4 自分の期待した言葉は祖父でさえ言い表せない類のものだと知って途方にくれている。

問七

D

 に当てはまる四字熟語を、次の漢字を組みあわせて答えなさい。

【一・帯・言・知・並・実・路・有・行・列】

問八

——— 3 「若いと云われるから腹が立つ」とあるが、「祐人」の「腹が立つ」理由を説明したものととして最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 大人が自分に「若い」と云うときは、自分が知りたい未来の姿ではなく、大人が知りたい未来の姿を語っているだけだから。
- 2 大人が自分に「若い」と云うときは、その言葉だけで卒業式の祝辞としては十分だとする、大人の傲慢さを感じられたから。
- 3 大人が自分に「若い」と云うときは、未来の自分ではなく、目の前の大人が意義を見出した事柄を語っているに過ぎないから。
- 4 大人が自分に「若い」と云うときは、人生の真実を語ることもなく、希望やかがやきを安直に結びつけた未来を語るだけだから。

問九 ——— 4 「十五歳は、もう若くない」とあるが、この言葉に込められた「祐人」の考えを説明したものととして最も適するものを次の中から選び、

番号で答えなさい。

- 1 老いてから知恵を聞いても手遅れなのだから、今のうちに他人の語る知恵に耳を傾けるべきである。
- 2 あっという間に老いるのだから、もはや十五歳である以上、受動的な姿勢で日々を過ごすべきではない。
- 3 自分はやや若くないのだから、他人をあてにせず、自分の期待する未来像は自らの言葉で語るべきである。
- 4 大人が語る未来を自分は思い描くことができないうのだから、十五歳であっても自分を若いと考えるべきではない。

問十 本文における登場人物について説明したものと最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 作品世界において祐人と父との交流が描かれていないことは、祖父が父としての役割を果たしていたことを示唆している。
- 2 卒業式の来賓の話は、中身のある有益な話ではなかったものの短い話だったため、祖父は批判的であったが母は満足している。
- 3 祖父と過ごした期間は短かったが、祖父の人を小ばかにした言動の奥に潜むものを漠然と感じ取っていた祐人は、祖父のことを信頼している。
- 4 祐人の母は息子の卒業を祝う気持ちはありつつも、親たちとのランチを優先させたいため、そのお詫びとして多めの御祝儀を祐人に渡している。

問十一 本文の表現について説明したものと最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 祖父の声で「 」がついていないものは、祖父が実際に話したことを祐人が思い出したセリフである。
- 2 祐人の夢の中における本の内容の描写が具体的なため、私たち読者は挿し絵がなくてもその内容を容易に想像できる。
- 3 本文において重要な役割を果たす夢は、どこから始まるのかが不明確なため、夢の内容が非現実的なものとして読者には捉えられる。
- 4 祖父が好んだ牛鍋はかつて家族の仲が良かったことを、祐人が食べる高級ハンバーガーは現在の祐人が孤独であることを、それぞれ象徴している。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ヨーロッパの人々の古代ギリシヤへの憧憬※1しんけいはことのほか強い。

1 「オリジンをギリシヤに見たい」、そうした思いの象徴のように感じたのが、ドイツの教育だった。

ドイツ・ベルリンにあるゲーテギムナジウム（日本の中学校・高校にあたる）では古代ギリシヤ語を週4日、3年間みっちり教えられる。優秀な子どもたちは古代ギリシヤ文字の読み書きを覚え、簡単なギリシヤ神話であればすらすらと音読していく。私立の伝統的な学校ではこうした古代語の授業が多く行われているようで、イギリスでも古代ギリシヤ語を教える学校は数校あるという。

ヨーロッパの基本的な教養は古代ギリシヤ語、ラテン語のどちらかを学ぶことだという。しかし、当然のことながら古代ギリシヤ語は、ヨーロッパでは現在全く使われていない。それでも重要視されているのは、古代ギリシヤ文明が自分たちの文化の基礎にあると考えられてきた歴史があるからだ。

2 今回のロケでベルリンの町を歩いてみて、意外なことに気がついた。博物館島のあたり、ペルガモン博物館や旧ナショナルギャラリーが建ち並ぶエリアを素直な気持ちで見してみる。そして、シュプレー川を渡って、対岸から見るとまるでそこはアテネのような姿をしている。ギリシヤの神殿が建ち、ギリシヤ建築が並んでいるように見える。

新古典主義の影響なのだろうが、これほどまでにギリシヤのスタイルに似ているという視点でドイツを見たことがなかったので、私はかなり驚いた。変な言い方かもしれないが、むしろ、アテネ以上にギリシヤらしいと感じる。なぜだろう？ ギリシヤの純化した姿がそこにあるからなのだろうか。そして、ベルリンは19世紀には「シュプレー川のアテネ」と呼ばれていたそうだ。

この事実に気づいたのは、フンボルト大学文化研究所美学教授であるレナーテ・レッツシユケ教授を取材したときだった。18世紀に活躍した美学史家ヨハン・ヴィンケルマンについて話を聞きにいったのだが、それだけではなく、収穫は大きかった。

ヴィンケルマンは古代ギリシヤの彫刻が美学的に格段に優れているとし、ヨーロッパの人々がギリシヤに目を向けるきっかけを間違いなく作った。レッツシユケ教授はこう語っていた。

「ヴィンケルマンは古代ギリシヤ文明は自由の文明であるとし、芸術分野においてあらゆる観点から自由と美しさを同一視して評価していったのです。ギリシヤ人は美しい人間だ。そして、人々はそこにとっても関心を持ちました。多くの人々は古代ギリシヤ文明が奴隷制度に基づいた社会であることを自覚しながら見過ごしていましたし、少なくとも言及しませんでした。ヴィンケルマンも、ギリシヤ彫刻が大理石の白だけでなく、色彩が残っていたこと

は分かっていたましたが、無視したのです」

ギリシヤはヨーロッパで純化され、理想化されていった。その象徴が「白色」だった。

ちなみにヴィンケルマンはギリシヤに一度も行ったことはない。ヴィンケルマンの名前を一躍有名にした一冊『ギリシア美術模倣論』を書いたときには、彼はギリシヤどころか、ローマにさえ足を踏み入れてはいない。頭の中で純化されたギリシヤが膨らんでいったのだろうか。

ヴィンケルマンの生家をドイツ・シユテンダルに訪ねた。彼が愛した幼い頃の愛読書ホメロスなどの当時の書籍が展示されていたのだが、その挿絵には神話の世界の美しさがもちろん、白黒で描かれていた。彼が育ったのはバロック時代で、華美な装飾にあふれていたという。それゆえに古代ギリシヤ世界に魅せられた。

ヴィンケルマンが古代ギリシヤ・ローマ世界に目を見開いた一つのきっかけは、イタリアのポンペイ^{※3}の発掘だったという。彼はポンペイの発掘に参加し、詳細な発掘記録を残している。そんなところから考古学者の元祖といわれるほどだ。ポンペイから発掘された美しいローマ彫刻や絵画。ヴィンケルマンにとっては、幼い頃に目にしてきたギリシヤ神話の活字世界が、現実のものとなって現れたように思えたのかもしれない。

シユテンダルにあるヴィンケルマンの生家は現在、博物館として公開されている。この地域は教育にとっても熱心で、地元の小生たちの見学が毎日のように行われている。楽しいのは、ヴィンケルマンの経験をたどるように、子どもたちが見学できることだ。まず子どもたちはポンペイ遺跡のリメイクに触れる。ベスピオス火山が噴火。そして、ポンペイ遺跡にあった民家の間取りを体験し、台所に触れる。次に古代ギリシヤの壺の絵付けや古代ギリシヤの遊びを体験する。

(中略)

もちろん、国民性ゆえの理由もあるだろうが、ドイツ人のギリシヤへの深い愛着は、こうした幼い頃からの体験によって培われていくのだろう。

19世紀の教育に目を転じれば、統一ドイツ直前、プロイセンの文部大臣を務めたフンボルトは、古代ギリシヤ語を必修とする教育改革も行った。これは、歴史的背景として、ドイツ統一に向けて、古代ギリシヤの純粋な世界を政治的に利用しようと考えたからだといわれている。小さな諸国に分かれたヨーロッパの後発資本主義国家であったドイツは、国民が一つとなるよりどころとして、「古代ギリシヤの精神」を利用しようと考えたという。古代ギリシヤの市民社会や美的な白い純粋な世界は強調されていた。さらに、^{※4}ヴィクトリア朝時代の流行がギリシヤのブームに拍車をかけていく。

イギリス君主であるヴィクトリア女王が結婚式で身にまとったウェディングドレスがヨーロッパ中で話題となり、流行していった。それは純度の高い色、白。白いウェディングドレスは、もちろん今も憧れの存在だが、流行の始まりはここにあるという。当時のイギリスのウェディングドレスは、金糸

や銀糸で刺繍が施された華やかな生地が多く使われていたが、ヴィクトリア女王が選んだのは、イギリスの伝統的な工芸品である白いシルクサテンとレース。^②高潔で高貴な姿に多くの女性たちが魅力を感じたという。ヴィクトリア朝時代は、女性の処女性も重要視されたようで、純粹で無垢なイメージを獲得するには白いウエディングドレスは非常に適していたことになる。

白が流行したのはウエディングドレスだけではない。ヴィクトリア朝時代の流行画家フレデリック・レイトンの絵画を見ると、大理石はあくまで白く、女性がロマンティックに描かれている。絵画全体の色調も白っぽい。

ギリシャを崇拜していたといわれるこの画家の代表作「プシュケーの水浴」。ギリシャ神話に登場する絶世の美女プシュケーは、白いギリシャの布を身につけ、白い大理石の前に佇む^{たず}。ドイツが教育を通して、ギリシャのイメージを純化していったとすると、イギリスは当時の最先端の流行から純粹なるイメージを作っていた。

大英博物館学芸員ピーター・ヒッグス博士はこう語っていた。

「ビクトリア朝時代、実は古代ギリシャ彫刻には色が残っているものもありました。しかし、当時の人々には受け入れられませんでした。人々は白い彫刻を好み、新しく彫刻を作る時に彩色すると、悪趣味だとヒナン^aされたため、白い彫刻ばかり作ったのです」

そんな流れの中で、大英博物館でもある事件が起きた。

(中略)

常に来館者でゴッた返すパルテノンギャラリー。大英博物館の中でも最も贅沢に空間が使われているこの壁面に、ギリシャ・アテネに存在するパルテノン神殿に飾られていた彫刻群が展示されている。パルテノン神殿は、メトープと呼ばれる彫刻板の浮き彫り彫刻やフリーズ(彫刻板)、さらに神殿の東西の破風^{はふ}に彫刻が備え付けてあった。アテネのゲキドウ^bの歴史の中、失われたものも多いが、現存する彫刻群の半分近くが大英博物館に所蔵され、私たちは見ることが出来る。ここを訪れば、人類のエイチ^cを感じ、そして、そのタクエツ^dした表現に感嘆するであろう。そして私には、美しい白以外に色があったことなど想像もつかない。頭の中には「白」以外の選択肢はない。日本でも西洋美術に対してのイメージは見事に作られ、西洋の彫刻は白いものだという思い込みが強固に作られてしまったことが、自分の感覚から分かってくる。

パルテノン彫刻は大英博物館のスポンサーであったデュビーン卿の指示の元、磨かれていたことが明らかになった。デュビーン卿は画商であり、古美術品収集家。1938年に自らの寄付によって大英博物館にギャラリーを新設した際、そこにパルテノン彫刻をチンレッツ^eするためクリーニングが行われた。この事件について、大英博物館名誉学芸員であるイアン・ジェンキンス博士はこう語った。

「デュビーン卿は、新しくできたギャラリーの石灰岩による壁の色が、彫像の大理石の色に近すぎたので、もっと白くしようとして、強く磨かせまし

た。その結果、表面の数分の1ミリメートルが削られてしまい、フリーズやメトープと呼ばれる浮き彫り彫刻が白くなめらかになったのです。この事件は、博物館の学芸員やスタッフが全く知らない間に起こりました。やがて、当時の新聞はスキャンダルとして書きたて、博物館のスタッフが数名解雇になる一大事となりました。この事件は、大英博物館の歴史上、きわめて異例のことでした」

(中略)

シンクレア氏はデュビーン卿の行為を恥知らずで無知な行為だと断罪したが、私には彼の以下の言葉の方が印象に残った。⁴

「白く削ったことは、現代の商業主義の一例でもあるのです。つまり、来館者が『古代の大理石は白い』ということ expecting しているので、それに迎合して白くするということです」

また、シンクレア氏は、亡くなってから何十年も経った人の精神を推測するのはむづかしいのだが……と前置きしたうえでこう語った。

「大英博物館のギャラリーには英国王も鑑賞に訪れる予定でしたし、デュビーン卿は称賛を得ることになっていたのでしよう。白は伝統的にもよい色ですが、ヴィクトリア朝時代に作られた純粹さ、清らかさをイメージするだけでなく、人種差別的な要素も含まれた色です。富も権力もある男性が『美しく、白く』と要求するのは、こうした要因もあるでしょう。」

古代ギリシヤ人は現代の西ヨーロッパ人の祖先であり、哲学・歴史・芸術を伝えた、という説が意図的に構築されたため、古代ギリシヤとその近隣国、特に芸術品に彩色されているエジプトやペルシヤとの間に線が引かれたのです。このことは、古代ギリシヤ人は、現代の我々（ヨーロッパ人）と、現代の非ヨーロッパ人よりも似ている、という観念を助長しました。当時の幼稚な学問である人種研究では、『古代ギリシヤ人は北ヨーロッパ人に似た青い目で、身長も高く、美貌であった』などと書かれています。もちろん、それは馬鹿げていますが、社会がそういった思想を求めている点もあります。自分たちは優勢であり、古代ギリシヤ人は自分たちの歴史に属するものであり、エジプト、ペルシヤ、インド、中国の歴史とは違うんだという説を聞きたいわけです」

聞きたいという思いに応えたい。そこから誤解は膨れ上がっていき、A 「白人史観」が暴走してしまう。この古代ギリシヤへの傾倒は、ナチスドイツとのエピソードにつながっていく。再び、ジェンキンズ博士のインタビュを記したい。

「1938年、ナチスはローマの所有者から^{※7}デイスコボロス（デイスコボロスのローマン・コピーの1つ。大英博物館所蔵のものとは異なる作品）を35万ドルという当時にしては大金で購入しました。デイスコボロスはミュンヘン・クリプトテーク美術館に所蔵され、ヒットラーがその前でナチスの腕章をしている薄気味悪い写真があります。ナチスは古代ギリシヤ人の思想を、^{※8}アーリア人として演出していたのです」

そのアーリア人としての「演出」が、見事に結実したのが、映画『オリンピア』だという。女性監督レニ・リーフェンシュタールが制作したこの映画では霧の中からパルテノン神殿が現れ、デイスコボロスのような円盤投げの男性が肉体美を披露し、美しい完璧な動きを見せつけ、あやしい光を放つ⁵。私はここでドイツのレッシケ博士の言葉を思い出す。

「19世紀、古代ギリシャ文明を知る場所はギリシャではなくイタリアでした。しかし、1930年代には実際に、ギリシャに行くことが可能になりました。そして多くの画家たちがギリシャへ渡り絵を描きました。」

B、カール・ロットマン（ドイツ・ロマン派の風景画家）は色彩を施した風景画をいくつも残したのですが、人々には全く受け入れられませんでした。これは文化史の中のパラドックスです。写真が普及すると人々は喜びました。写真家たちは重たい機械カメラを担いで、ギリシャに出向き、建築物を撮影しました。写真はまた再び白黒でした。新しい技術の媒体によって、古いイメージを再現することが可能になったのです。

そしてその流れは映画にまでつながります。レニ・リーフェンシュタールが撮影した『オリンピア』は白黒映画です。彼女は冒頭で古代ギリシャ文明を回想して円盤投げ・デイスコボロスに息を吹き込みます。もうもうとした霧の中のイメージで古代の芸術を包み込みました。要するに間違いと知りながら続けられたのです。古代ギリシャの白いイメージはこうして、20世紀に入っても終わらなかったのです」

絵描きがカラーで描いても人々は受け入れず、当時の最先端技術である白黒写真を人々は喜ぶ。そして白いイメージは保存され、さらに白黒映画によってもっと強まっていく。技術の革新が古代ギリシャの白い理想イメージも保存したとは！運命の悪戯のような話ではないか。

（長澤智美『NHKスペシャル知られざる大英博物館 古代ギリシャ』一部改変したところがある。）

※1 憧憬：あこがれ。

※2 ホメロス：古代ギリシャを代表する叙事詩人。

※3 ポンペイ：イタリア南部の古代ローマ時代の遺跡。

※4 ヴィクトリア朝時代：イギリス史上におけるヴィクトリア女王の治世（1837～1901）。

※5 シンクレア氏：大英博物館に展示されていたパルテノン神殿の彫刻が削り取られた事件に詳しいイギリスの作家。筆者がインタビューを行った。

※6 ナチスドイツ：1933年から1945年までヒットラー及び国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス）支配下のドイツの呼称。全体主義国家としてユダヤ人の虐殺など多くの人種差別的政策を行った。

※7 デイスコボロス：古代ギリシャの円盤投げ選手の彫刻。

※8 アーリア人：ナチスドイツの提唱した自分たちを指し示す呼称。その発想は人種差別や優生学を生み出した。

問一 — a k e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 本文中の

A

 ・

B

 に当てはまる言葉として最も適するものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

- 1 それでも
- 2 たとえば
- 3 そのうえ
- 4 いわゆる
- 5 つまりは

問三 — ①・②の語句の意味として最も適するものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

①「目を転じ」る

- 1 視野を一方向に向ける
- 2 視覚を以前より広げる
- 3 視座をしつかり定める
- 4 視線を別のものへ移す

②「高潔」

- 1 美しく高価な印象を与えること
- 2 法律や秩序を厳守し従順なこと
- 3 気高く立派でけがれないこと
- 4 自己を重んじ一人孤立すること

問四 —— 1 「『オリジンをギリシャに見たい』、そうした思いの象徴のように感じたのが、ドイツの教育だった」とあるが、筆者はドイツにおける古代ギリシャと「教育」の関係をどのようなものとしてとらえているか。その説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 古代ギリシャ文明が自分たちの文化と同質であると考えてきたドイツ人たちは、学校教育を子どもたちにドイツとギリシャは語学的にも同一の起源を持つという虚偽の事実をかたくなに教えるものにとらえている。

2 ヨーロッパの基本的な教養であるラテン語よりも古代ギリシャ語の授業を重視するドイツの教育は、19世紀の国民を一つにまとめようとする古い政治家の発想による学びが現在までも続いているととらえている。

3 著名な美学史家の半生を体験的に学ぶ博物館に代表されるドイツの教育では、小学校から高校生まですべての生徒が古代ギリシャ語を学ばなければならず、不自由で選択肢にとぼしいものであるととらえている。

4 かつて政治的な目的によって生まれたドイツの古代ギリシャ語教育は現在まで続いており、一部では博物館での体験型教育などとともにドイツの人々に古代ギリシャへ特別な思いを抱かせるものにとらえている。

問五 —— 2 「ベルリンの町を歩いてみて、意外なことに気がついた」に関する説明として不適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 アテネのような姿をしているベルリンの町に新古典主義の影響や、その背景としてのドイツ人の心に宿る古代ギリシャへの強い愛着を筆者はみとめた。

2 筆者はベルリンの町をギリシャとの類似という視点で観察したことがなかったので、ベルリンがギリシャ的なスタイルに満ちていることに驚いている。

3 筆者は素直にベルリンの町を見たことがなかったので、「シユプレー川のアテネ」としての古代ギリシャ的な町の姿に無関心だった自己を恥じている。

4 ベルリンの町がアテネ以上にギリシャらしいという事実には、町を作ったドイツ人たちが持つ、理想化された古代ギリシャのイメージを筆者は感じた。

問六 ——— 3 「イギリスは当時の最先端の流行から純粹なるイメージを作っていた」とあるが、この説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 国民の統合の目標として純粹な「ギリシャ」イメージを普及させたドイツとは異なり、繊維産業の盛んなイギリスは女王のドレスや美術作品の衣装に自国製品のシルクサテンなどを用いることで人種を超えた白く純粹な国民としての一体感を獲得したということ。
- 2 教育を通じて理想としての「ギリシャ」像を形成していったドイツとは異なり、イギリスでは女王のドレスや流行画家の「白」を基調とした彩色によって「白」の純粹さが強調され、古代ギリシャもまた純粹で純白なものというイメージがはぐくまれたということ。
- 3 建築と教育に純粹なイメージをこめたドイツとは異なり、教育が劣っていたイギリスでは華やかさとは正反対の質素な生地が流行し、女性たちはその白さに自己の純粹さを投影したことによって美術作品にも「白」は純粹であるという図式が定着したということ。
- 4 幼少期からの教育を通してギリシャ風の純粹な国民を育成したドイツとは異なり、イギリスは女王や古代ギリシャ神話の衣服を通じて純粹で無垢な「白」のイメージを主張し、当時の女性や子供を「けがれない存在」と一方的に規定し、強制したということ。

問七 ——— 4 「私には彼の以下の言葉の方が印象に残った」とあるが、どのような「言葉」か、その説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 当時の大衆の望みに応えるかたちで事実をねじ曲げてしまうような、現代にまで続く商業主義への指摘とともに、「白」が生み出す純粋さや清らかさのイメージには優勢な自分たちヨーロッパ人とそうではない非ヨーロッパ人を区別する人種差別のニュアンスが多分に含まれているということ。

2 古代ギリシヤ人は現在の西ヨーロッパ人の祖先であり、文化的にも他民族に優越しているという意図的に構築された発想を無邪気に信じた民衆を扇動する商業主義への怒りとともに、「白」は純粋さと同時に高度に政治的かつ思想的な色であり、現代において断罪するべきであるということ。

3 他者の思いに報いたいという親切心が事実を誤らせ、権力者に称賛を受けたいがために彫刻を削る行為は恥知らずで無知であるという批判とともに、「白」が当時のヨーロッパ人と古代ギリシヤ人を結びつける数少ない要素であるにもかかわらず差別的な意味合いを付加させてしまったこと。

4 たとえその出自がヨーロッパでなくとも、「白さ」によって自分たちが古代ギリシヤ人の子孫なのだという当時の幼稚な思想への評価とともに、この時代こそ商業主義の隆盛によって歴史的事実を歪曲しても一切の罪悪感をおぼえない人間が生まれた、現代まで続く問題の原点であるということ。

問八 ——— 5 「あやしい光を放つ」とあるが、筆者がこのような表現を用いる理由として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 ナチスの作成した映像は古いドイツと新しいドイツの歴史の連続性を繰り返し主張する誤りの少ないものであり、その色彩豊かな映像「演出」もまた見事だったので筆者は困惑とともにためらいを覚えるから。
- 2 ナチスが高額な代金を払って購入した彫像は古代ギリシヤのものではなく後世の模造品であるのに、映像の中ではまるで本物かのように「演出」されていたことに筆者は落胆と同時にさげすみの念を覚えるから。
- 3 古代ギリシヤ人の思想をナチスの哲学として「演出」することは愚かなことであるのに、おそろしい独裁者であるヒットラーがギリシヤ人のように振る舞う姿に筆者はいきどおりとともに恐怖を覚えるから。
- 4 古代ギリシヤ人と自分たちを同一視するという、何の科学的な根拠もないナチスの思想とはうらはらに、その思想を「演出」した映像そのものの美しさに筆者は魅惑されると同時に居心地の悪さを覚えるから。

問九 ||| 「文化史の中のパラドックス」とあるが、具体的にどのようなことですか。本文中の言葉を用いて六十字以内で説明しなさい。

問十 本文の説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 ヨーロッパ、特にドイツにおいてギリシャが理想化された原因として、当時後進国だったドイツ自体が国民と国家の統合の象徴として「ギリシャ」という共通項を欲していたことが挙げられる。結果、この強引な手段としての「ギリシャ」と現実のギリシャのギャップにドイツは現在も苦しめられている。

2 ヨーロッパ諸国において、古代ギリシャと自国との連続性や「白」の優位性が主張されたのは19世紀に入ってからであり、美術や教育、服飾など様々な方法で強調された「白」の純粋性や優位性は20世紀に入ると逆に悪趣味な発想であるとして文化的にも政治的にも遠ざけられるようになった。

3 大英博物館にあるパルテノンギャラリーの彫刻が白く削られた事件は、ヴィクトリア朝からの「白」は純粋だという衣服や美術を通して蓄積されたイメージや、自らを古代ギリシャと一体化させることで自己と他地域の人間とを区別し優位に立とうする発想が複合的に組み合わさった結果だといえる。

4 本文の最後で「運命の悪戯」と筆者が述べていることは、最初は純粋だった古代ギリシャへのあこがれが時の政治家や権力者の手によって徐々に彼らにとって都合のいいものに変えられてしまい、最終的にはナチスを生み出し、また人類を悲惨な戦争に巻き込んだ「イメージの私物化」を指している。

(問題は、これで終わりです。)



